

お釈迦様は、
恩を知り、感じ、
報いることの大切さを
教えられました。



実は、お釈迦様のお母様は、出産後まもなく、亡くなっておられます。

当時も出産は大変で、お母様のマーヤー夫人は、住んでおられたカピラ城から、実家であるクリ城に向かって移動中産気づかれ、ルンビニーという美しい花園で、4月8日、出産なされたと言われています。

今日でも出産がありますと、母子ともに元気ですか、と尋ねられます。

赤ちゃんが元気かどうか、これはもちろん关心ありますが、出産には、お母さんの身体にも大変な負担がかかりますので、こう聞く訳です。

子供を出産する時の痛みを、陣痛と言います。

陣痛のお母さんは、青竹を握りつぶしてしまうといわれるほどの苦しみで、男性は死んでしまっだろうと言われるそうです。

陣とは、戦を表す字です。

陣地、陣太鼓、陣羽織。みな戦に関する言葉。

出産に臨む女性は、男子が戦に臨む覚悟であるのです。
生きて帰ってこれないかもしれない。
命を落とすかもしれない。

母はそんな苦しみを受けて下さり、私達を産んでくださる。
お釈迦様は、臨生受苦の恩と説かれました。
生まれるに臨みて、苦しみを受ける。

恩とは、原因を知る心と書きます。
おかげ、という言葉がありますが、
どなたのおかげで、今の私があるのか。
恩を知り、恩を感じ、そして、恩に報いようとする。
知恩、感恩、報恩を教えられたのがお釈迦様でありました。

親の恩は、天の極まりなきが如しといわれますが、
なかなか具体的にわからない私達に、
10に分けて教えられたのがお釈迦様でした、
それをささやかな小冊子にまとめてみました。

毎日が苦しすぎる。

さっさと生きて、さっさと、死にたい。

どうやったら、ラクに死ねるか。

そんなことばかりを、最近考えている。

頭がもう、ヘンになりそうだ。

そんな声が、ネット上には溢れています。

友達や同僚との会話にこそ出てこなくとも、

掲示板への書き込みは、悲痛な叫び声にも聞こえます。

そんな人たちに、「人間に生まれてよかった」という本当の幸せのあることを、教えてゆかれたのがお釈迦様でした。

お釈迦様は、私達が人として生まれ、ここまで成長するまでには、大変な両親の恩を受けているのだよと、

親の恩の深きことをつぶさに教えられ、

『仏説父母恩重経』には、「親の大恩十種」として、

私達が親から受けている恩を、以下のように教えておられます。

親の大恩十種

- (1) 懐胎守護の恩
- (2) 臨生受苦の恩
- (3) 生子忘憂の恩
- (4) 乳哺養育の恩
- (5) 廻乾就湿の恩
- (6) 洗濯不浄の恩
- (7) 嚙苦吐甘の恩
- (8) 為造悪業の恩
- (9) 遠行憶念の恩
- (10) 究竟憐愍の恩



お釈迦様は、人間の値は何によって決まるのか。

持っているお金やロレックスの時計をしているのかどうか。

あるいは、仕事の業績がどうか、才能など

そんなものによって決まるのではない、その人が、

「どれだけ、恩を知り、感じ、報いようとする気持ちがあるかどうか」

だと教えておられます。

「恩」とは「原因を知る心」ということです。

どうして、今の自分がこのような立場でおれるのか、

それは、これらの方のおかげがあってこそ、と、

恩を知り、感じて、報いる気持ちが大事なのだと教えられています。

○知恩

○感恩

○報恩

と言われますが、まず、私達がどのような恩を受けているのか、知らないことには恩を感ずることはできません。

そして、恩を感じなければ、報いようという気持ちは起きて来ません。

中でも、私達が身近に大変な恩を受けている親の恩を
まず知ることが大事であると、お釈迦様はつぶさに教えておられ
ます。

世間でも、

「鳩に三枝の礼あり、烏に反哺の孝あり」と言われます。

ぽっぽぽっぽと、公園や駅の電線に止まっている鳩が、
桂三枝に礼をした、ということではありません。

2012年、文枝になっていますから、これは違います。

鳩は大変に孝行な鳥と言われるそうで、

必ず3本下の枝に止まって、礼を尽くすと言われるそうです。

烏とは、あの真っ黒な鳥です。

どんな強力な洗剤で洗っても、決して白くならないでしょう。

反哺とは、口移しです。

小さい頃は空を自由に飛び回ることができないので、

親鳥から口移しで餌をもらいます。

そして鳥は成長するのですが、今度親鳥が飛べなくなると、

育ててもらった恩を忘れず、自分が空を飛び回って集めた餌を
親に食べさせてあげるといいます。

このように、動物(畜生)でさえも恩を感じるのだ、
まして人間が恩を感じなくては、それ以下であると、
「感恩なきは、畜生に劣る」と言われ、
1+1=2がわからない。
漢字を読み間違えて、バカなやつだと言われてもよい。
ただひとつ言われてならないことは、
「恩知らず」と言われることであると、仏教では言われるのです。

それほどに、「恩」を大変に重きをおいて教えられ、
仏教は「恩の教え」と言われるほどお釈迦様は徹底して教えてお
られます。



(1) 懐胎守護の恩

「懐胎」とは身ごもることですから、私達は、身ごもってから、十月十日もの長きにわたり、お母さんは私達を大切に育ててくださるということです。

妊娠すると、酸っぱいものが欲しくなるそうですが、これは、おなかの赤ん坊に骨を溶かし与えるからと言われるそうです。

「胎教」という言葉があります。

お子さんがおなかの中にいる時には、重い物を持ったり、急な動きを避けたり。それだけではなく、暴力的な映画や言葉などを聞かないように気をつけたり。言い争いを避けたり。タバコの煙にも気をつけます。

そしてクラシックをきいたり、観葉植物を近くに置いてみたり。絵本をお腹の子供に読んで聞かせたり……

男性の私には知り得ない苦勞の数々でしょうが、

本当に頭が下がります。

まさに「血分き肉与える」の言葉そのものに、
お腹の子を育み私達を、無事出産まで護ってくださるのが、「懐
胎守護の恩」です。



(2)臨生受苦の恩

誕生日は、私が親を一番苦しめた日……

だから、せめて粗食を食べて、その母の恩を偲びたい……

そんな人が江戸時代にありました。

普通、誕生日といえば、豪勢な食事ですという

イメージがありますが、

水戸黄門は、誕生日にはもつとも粗末な食事をしたことが、

伝えられています。

最初の頃、家臣の者は、年に1度のその日のことをついつい失念

し、誕生日だからと特製の膳を振る舞ってしまってから、

そうだったと気づき、あわてて粥一膳を出すことが

あったと言います。

しかし親思いの黄門の心がやがて家臣に知れると、

二度とそのことを忘れることはなかったと言います。

冒頭にも紹介致しましたが、お釈迦様は生まれられてまもなく、

お母さんのマヤー夫人を亡くしておられます。

お釈迦様は、この親の大恩の2番目に教えられた「臨生受苦の恩」に、特別の思いを込めておられたのでないかと思わずにおれません。



(3)生子忘憂の恩

普通、私達は、自分に苦しみを与えた人物を、
すぐに快く受け入れることはできません。

しかし、子供は別です。

お母さんにとって、子供は命・・・。

よく生まれてきてくれたね。

生まれてきてくれて、ありがとう。

そんな気持ちになると、よくお聞きします。

さっきまで、この子を産むために、

大変な陣痛を味わってきたのに。

それまでの妊娠期間にも、いろんな苦しみを乗り越えてきたの
に。。

それまでも苦しみも全て吹き飛んで、

生まれた我が子を我が事のように喜んでくださる。

それが、3番目の「生子忘憂の恩」です。

(4)乳哺養育の恩

世界で一番大変な仕事。

ビデオチャットによる求人募集で、
応募者に対して、担当者が淡々と条件を伝えてゆきます。

「職種は、現場総監督。これは、簡単な仕事ではありません。
責任はとても広範囲で、職務はとても流動的です。
薬や調理の専門知識が必要です。

ほぼ1日立ったままの作業が要求され、もしくは屈んでいるか。
様々な力が要求され、複数の職務を兼任をしてもらうことになり
ます。仕事は365日、休日はありません・・・」

応募者はみな呆れかえって、
そんなことありえない、という表情です。

「それは、ちょっとひどすぎやしないか？ ランチは？」

「同僚が全員終わったらできます」

「休憩は？」

「ゼロとってください。」

あと、正月、クリスマスは、余計に忙しくなり、

寝る時間ありません。

だから、私的な時間はあきらめてもらうしかありませんね。」

「それって、合法なの？」

「合法です。ちなみに、あなたがこれによって得られる

給与は……

ありません。ゼロです。

どうです？ 素晴らしい仕事じゃありませんか？……」

さて、あなただったら、いかがですか？

お釈迦様は、親の大恩の4番目に「乳哺養育の恩」と
言われました。

妊娠してからというもの、ずっとおなかの中に赤ちゃんを守り、
大変な陣痛を経て出産、そして子供が誕生すれば我が事のように
喜んでくださる。

3番目までは、妊娠から出産まで私達が受ける恩です。

赤ちゃんができると夜泣きして睡眠時間もろくに取れない。

ちよつとはいはいができるようになると、

いろんなどころに頭をぶつけて危険で、

角に柔らかいものを貼って、安全なようにしないといけない。
食事も離乳食から普通の食事ができるようになるまで、
いろいろなものをその時期に合わせて作る。

「乳哺養育の恩」とは、
乳を与えて養い、育ててくだされる恩ですが、
母乳というのは、赤ちゃんの成長にあわせて、
微妙に成分が変化してゆくそうです。

そして、母乳を置いておくと、その色は赤くなる。
お母さん血液がそこに含まれているからなのだそうです。

まさに、血分き肉与えて育てて下さる御恩で、
今の私があるのだと感謝せずにおれません。



(5)廻乾就湿の恩

次の「廻乾就湿の恩」とは、いわゆる「おねしょ」です。
布団の上で、ぼっこーりと温かい感じがしてきて、
気づいたら、世界地図ができている。

おむつをしていればそんなことはないでしょうが、
寒い日でも母はこんな時、自分を乾いた温かい布団に
寝かしつけてくれ、自分は湿った所に休む。
そんな恩を言われます。



(6)洗滌不浄の恩

さらに、「洗滌不浄の恩」とは、

今でいえば、紙おむつがありますが、

昔そんな使い捨てのものがなかった時は、

すべて手で洗っておりました。

お母さんは赤ん坊がおむつに出したものを触って、

赤ん坊の健康状態を判断したりします。

そしておむつをきたないとも思わずに洗ってくださるのです。

そうしているうちに、爪の間に赤ちゃんが出したきたないものが挟

まり、その手で食事をしているうちに、

知らず知らず口に入ってしまう。

他の人が見れば汚いと思うことでも、

母は我が子のこととなれば、それを厭わずやったださされる。

そんな恩を言われます。

ちなみに、先ほどの求人者のビデオチャット。

「どうです？ 素晴らしい仕事じゃありませんか？」

「とんでもない。笑えないジョークね」

「でももし、あなたのまわりに現にそんな条件で働いている人が
あると知ったらどう思いますか？」

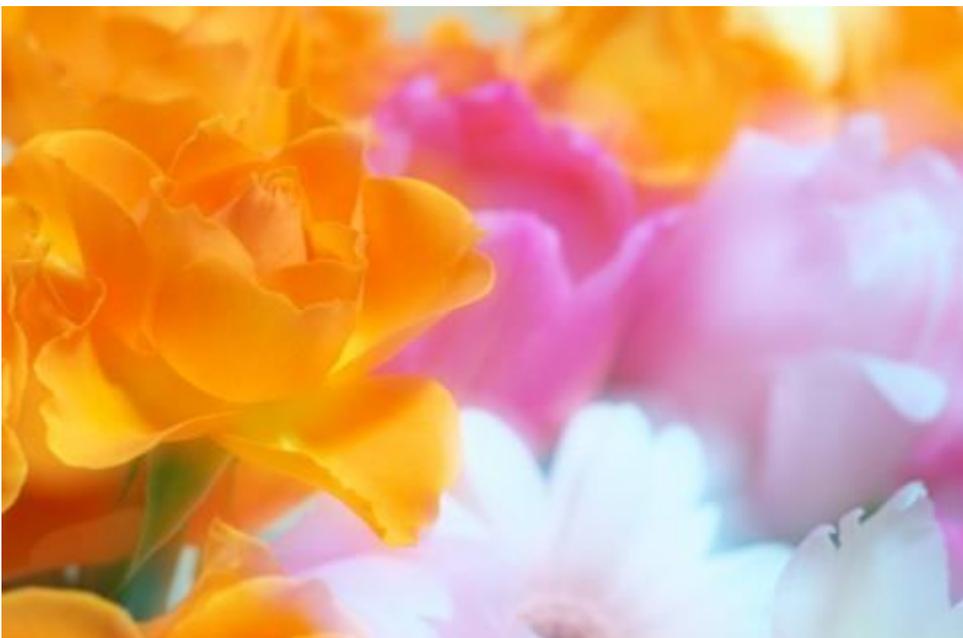
「あるんですか？」

「ありますよ。あなたのまわりにも、たくさん・・・
世界に数十億・・・」

「それは、誰ですか？」

「・・・お母さんですよ」

その日は、母の日だったのです。



応募者はみな涙ぐみ、声を詰まらせました。

「お母さんは・・・最高。」

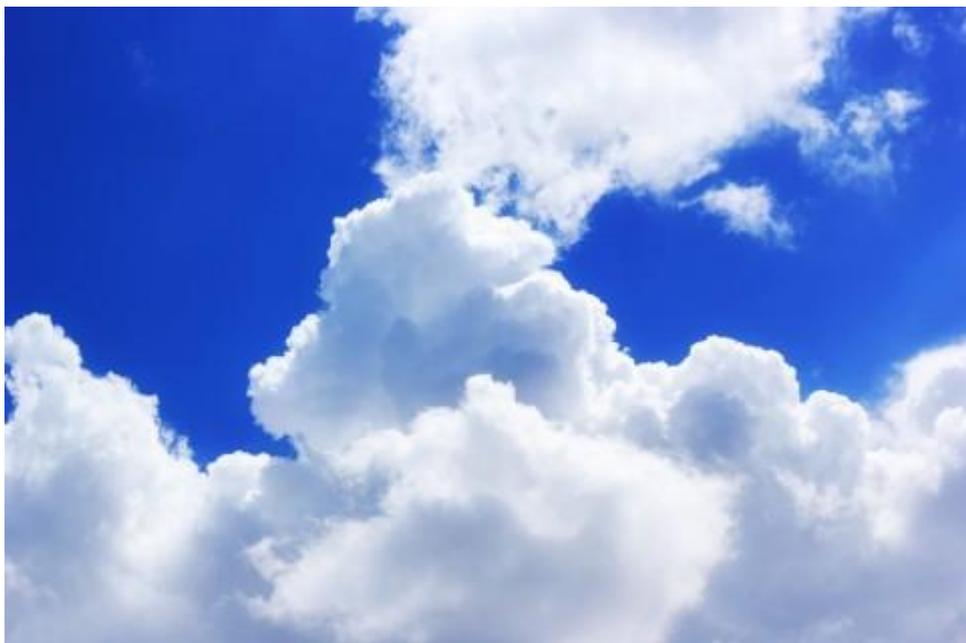
フェイスブックでたくさんシェアされた映像を、

見られた方もあるかもしれません。

一言、感謝の言葉を送ったら、どんなに喜ぶだろうか・・・

誰しも思いあたる母の苦勞。

忘れがちな親の恩を忘れてはならないと知らされます。



(7) 嘸苦吐甘の恩

「お母さんは魚の骨が好き。

だって、いつもぼくにおいしい身の部分をくれるもん。

どうしてかな。

この間、おいしいからこっちも食べたから、って言ったら、

「ううん、お母さんはいいのよ」って言っていた。

へんなの。

なんでうちのお母さんは魚の骨が好きなんだろう」

小学生がつづったあどけない文章。

本当の親心を知るのは、ずっと後になってからのことでしょう。

7番目の「嘸苦吐甘の恩」とは

苦きをついばみ、甘きを吐くとありますが、

自分が辛い思いをしてでも子供にはよいところを

まわしてくださる恩です。

自分は粗末なものを食べてもいいから、

子供にはおいしいものを与えたい。

服も自分はおさがりでもいいから、
子供にいいものを着せてやりたい。
大変な仕事をしつつ、つつましく暮らしておりながら、
子供には仕送りをしてくださる・・・

思えば、キリがありません。

ちなみに、お父さんの恩はどうなのかと言われる方もありましょ
うが、10の恩のすべてに、お父さんの恩も含まれます。

結婚式などでお重に入ったおいしい食事を、
たくさん持って帰ってきてくれて、
食べさせてもらった記憶のある人も多いことでしょう。

職場でのおやつをいつも食べずに持ってきてくれ、何も知らず、
「お父さんは、いつもおいしいお菓子をもらっていていいなあ」
などと思ったりしているのです。

自分が食べておいしい、というより、
子供が食べて喜ぶ顔を見たい。

まさに、父親の愛、嚙苦吐甘の恩です。



(8) 為造悪業の恩

次の「為造悪業の恩」とは、子供のためと思えば、
やってならないことを犯してでも子を護ってくださる恩です。

洋の東西を問わず、家が貧しく子供に食べさせるものがないこと
から、親心ゆえ、盗みをしてしまう物語が伝えられていますが、
みな、為造悪業の恩です。

古今東西、かわらぬ愛情を知らされます。



(9)遠行憶念の恩

「遠行憶念の恩」とは、子供が遠くに行っても、思い続けてださる恩です。

「憶」とは時々思う、「念」とは常に思っていることを言います。

ちよろちよろと地面に水源が現れるのは、ずっと、地下水脈が広がっているからであるように、

縁にふれ折にふれて、親が子供のことを思い出すのは常に思い続けているからです。

「親」という字は、「木の上に立って見る」からきていると言われます。

遠くに行った子供を心配し、木の上から立って見る姿は、親心の象徴と思わずにおれません。

子供が下宿をしていれば、その地域で台風や事故のニュースがテレビで報道されると、

真っ先に子供の顔が思い浮かぶ。

慣れない土地で暮らしている子供がお金に困っていないか、

食べる物が足りずに困っていないか。

下宿先で、どうにもお金がなくなり、食事も切り詰めている時に、母からの電話。

「あんた、最近電話もかかってこないけど、お金はあるの？」

「ああ、大丈夫だよ」

「最近、何食べてるの？ 元気にしてるの？」

「大丈夫、大丈夫。もう出かけなきゃならないから、切るよ」

どうして親は自分のことがわかるのだろう。

心を見透かされたような電話にドキッとした経験のある人もあるでしょう。

「親憶う心に勝る親心」と言われます。

父はどうしているだろうか、母は今どうしているだろうかと思う私の心配より、

一層父母は強く私を念じてくださり、今の自分があると知らされます。

時々、便りを書いたり、メールをしたりして、

心配をかけてはならないと反省せずにおれません。

(10) 究竟憐愍の恩

最後の「究竟憐愍の恩」は、終生死ぬまで、
どんなに年をとっても子供は子供、私のことを思い続けてくださる
恩です。

もう大人になったのに、

「車に気をつけろ」

「寒いからもう1枚もって行きなさい」

「お金は大丈夫なの？」

「食べるものはある？」

こちらが父母に心配かけてはならない年頃なのに、

逆に心配かけ続けの自分を知らされ、涙せずにおれません。

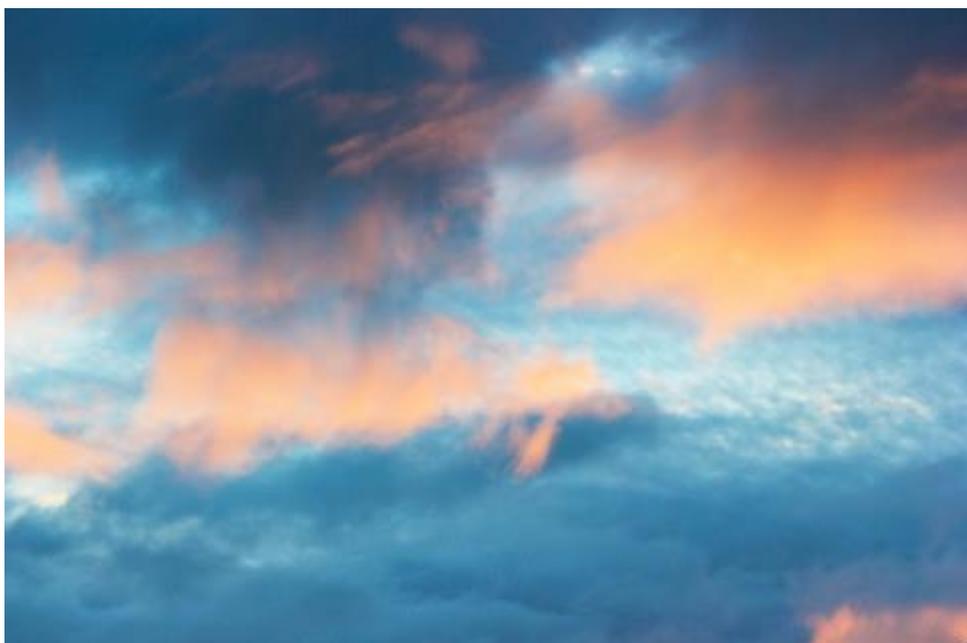


これら10の恩を一貫して貫くのは、
自分はどれだけ辛い思いをしてもよいから、
子供に幸せになってもらいたい、喜ばせたい、の心です。

これは、仏教では「慈悲」の心といわれます。
相手の苦しみを抜いて、楽しみ、幸せを与えてやりたいという心
です。

これらを説かれたお釈迦様に対し、
お弟子が、どうしたら、私達は親の恩に報いることが
できるのでしょうか、と尋ねると、
外で珍しい食べ物や土産をもらったら、
まず親にもとに届けなさい、立派な家や車を用意して、
両親の恩に孝行しなさい、などと、具体的に教えられています。

しかし、それだけでは十分でない、
どれだけ物やお金に恵まれたとしても
それはしばらくの間だけのこと。
仏法に説かれた本当の幸せを伝えなければ、
本当の孝行にはならないのだと、結ばれています。
ところが・・・



「こんなに苦しいのならば、生まれなければよかった」

「いっそのこと、早く死んでしまいたい」

「どうしたら、ラクに死ねるか。そればかりを考えている」

そんな声はいろいろなところから聞こえてきます・・・

平成10年に3万人を超えた自殺者は、
それから10年以上にもわたり、
3万人以上の数をキープし、
ようやく最近3万人を下回ったとそうですね。

しかし実際は計上されていない人数や、
また、予備軍や未遂も含めれば、
おびただしい数になると言われます。

もし1年の自殺者が3万人以上とすれば、
1日に1万人ほどの人がこの日本で自ら命を
断っていることになります。

日本は、自殺大国と言われる側面も持つのです。
ものが豊かになれば、皆幸せになれると信じていた時代は終わり、
それなりには満足しているけれども、それなりには不安である。
現代は未足の時代と言われます。

底知れぬ不安感と漠然とした空虚感に苛まれ、
自ら命を絶つ人は、跡を絶ちません。

果たして、人間に生まれたことは、有り難いことなのか、
忌むべきことなのか・・・。

お釈迦様は、

**私達が人間に生まれたことは、
大変に幸せな、有り難いことなのだよ・・・**
と、教えられています。



或る時、お弟子の阿難に対して、
「そなたは人間に生まれたことをどれくらい喜んでいるか」
と尋ねられました。

「大変に喜んでおります」と答えた阿難に対して、
1つのたとえを説かれています。



「果てしなく広がる海の底に、1匹の目の見えない亀がいる。
その亀が100年に一度回目顔を出すのだ。
海の上には、1本の丸太ん棒が浮いている。
丸太ん棒の真ん中には小さな穴がある。
その丸太ん棒は、風のまにまに波のまにまに
西へ東へ、南へ北へと漂っているのだ。
阿難よ、100年に一度浮かび上がるこの亀が、
ひょっとこの丸太に頭を入れることがあると思うか」

「それはそれは、お釈迦様とても考えられません」と

答える阿難に対して、

「絶対にないと言い切れるか」と

お釈迦様は念を押されると、

「それは・・・絶対にないとは言えませんが、

何億年何兆年の間にも、あるかないかのことでしょう」

と答えています。

それを受けてお釈迦様は、

「阿難よ、実は我々が人間に生まれることは、

この亀が丸太ん棒の穴に頭を入れることがあるよりも

難しいことなんだ、有り難いことなんだ」と説かれています。

「有り難い」とは「有ることが難しい」ことで、

めったにないと言います。

何かものをもらって有り難いというのは、

こんな私が何かをもらえることは、

本来有ることではありませんから、有り難いことだということにもなりますね。

しかし、多くの人は、喜んでいるどころか、
何でこんなに苦しいのに生まれてきてしまったんだろうかと、
呪っている人ばかりなのです。



そんな私たちに、

生きている時に、本当の幸せになれるのだよ

と、教えておられるのがお釈迦様なのです。

そして、本当の幸せになれた時に、生まれてきてよかった、
生きてきてよかったと、本当の親の恩が知らされるのです。

あなたも、そんな幸せに、必ずなれます。